

# 私立「時習学館」学籍名簿について

大湖賢一

をはじめ、小杉・住吉・木月などこの地域のかなり有力な子弟が学んでいることがわかる。今後、名簿の分析とともに、文山自身の経歴などを詳しく調べていく必要がある。

川崎市中原区下小田中に、安楽寺という曹洞宗の寺がある。ここには明治二十一年から戦中まで、私立学校として「時習学館」（明治二十五年からは「時習学校」と改称）が存在していた。  
この学校は、小学校を卒業した子弟を対象に漢字・歴史学・数学・英語を教え、「品行方正ヲ矯メ地方ノ標準タラン」ことを目的として教育がおこなわれていた。

この学校の創設者は、安楽寺の住職であった宗澤文山である。安楽寺に残されている「私立学校設置方法書」に記載された履歴によると、文山の経歴は以下のとおりである。

- 文久元年九月一日生まれ
- 明治二年二月より十年六月 東京府士族柴山信篤に漢学を学ぶ
- 同十年七月より十二年三月 静岡県士族平川清一に数学を学ぶ
- 同十二年七月より十五年十一月 八王子の曹洞宗学校に学ぶ
- 同十八年二月より十九年十二月 東京麴町の数学専修義塾に学ぶ
- 同十六年一月より十七年一月 八王子曹洞宗学校助教
- 同二十一年十月 私立時習学館設立

この時習学館の学籍名簿の第一冊に記載されているのが、宗澤文山の筆と推定される「私立時習学館学籍名簿序」である。この文章がいつの頃のものかは特定できないが、同名簿には明治三十四年までの在籍生徒が記されているので、遅くともその頃までの文章であろう。内容としては仏教にもとづいた教育観が展開されている。

安楽寺には現在まで、時習学館の生徒名簿四冊が残されており、なかには昭和十年に多摩川に丸子橋を架橋することに尽力した安藤安（中原町町長）や岡本かの子の実兄である大貫雪之助などの名前が見受けられる。この名簿によると、時習学館には地元の下小田中

## 時習学館 学籍 簿

明治二十二年四月二十日開校御届（印）

### 私立時習学館学籍名簿序

夫レ人類ノ性質トシテ総テ同一ナル能力ヲ具有シ米レルモノナレトモ、此能力モ実ニ之ヲ誘引發揮スル力及之ヲ全備完成セシムル力トニ由テ始テ外部ニ表出スルモノナレハ、其能動的ノ二力ノ性質如何ニ、随テ受動的ノ自然能力モ亦偏倚不順序ノ生長ヲナスヲ免レス、彼ノ植物ヲ見ヨ、其粒々タル一小種子カ初メ土中ニ於テ或ル滋養質ヲ撈得シ、而後萌芽ヲ張り枝ヲ生シ幹ヲ

長シ葉ヲ茂リ花ヲ開キ実ヲ結フニ至ルモノナレトモ、若シ此種子ニシテ最初ニ於テ其滋養質ニ遭フコトナクハ豈植物固有ノ発達ヲ見ルコトヲ得ンヤ、人ノ能力モ亦然リ、外力ノ補助ヲ得ス若クハ補助ヲ与フルモノナキトキハ空シク潜伏シテ遂ニ其働作ヲ現スルノ機会ナカルヘシ、

然ルニ若シ幸ニシテ（人モ草木モ共ニ）順序正シク偏倚ナキ外部ノ力ニ接セラレ、不増不減ニシテ適度ナル肥料ノ供給アルトキハ其發育実ニ驚クヘキモノアラン、然レトモ凡テ有機物ノ生長（無機物モ亦同ク）ハ或ル一定ノ標準ニ拠從セサルトキハ之ヲ圓滿無疵不垢不淨ナル生理上ノ活動ト云フヘカラス、其所謂標準トハ真理界ノ十如是、即チ物体学上ノ通性ト真理界ノ兩作用即チ差別平等ト是ナリ、夫ノ動物ハ動物タリ植物ハ植物タリ各々其性ニ拠リ其力ニ応シ其分ヲ尽シ、諸他万物互ニ己レニ必需ナル、而相当ナル滋養分ヲハ無碍ニ因融シテ四肢内臟意匠若クハ根幹枝葉花実ミナ正當不二ノ順序ニ随テ生長シ、美ニシテ且善ナル対等（差別）調和（平等）ノ好景ヲ現スヘシ、之ヲ稱シテ各々其性ヲ尽スト云ヒ、各々其処ヲ得タリト云ヒ、偏頗ナキ順生長ト云ヒ、真如界ニ於テ運動スト云フカ、社会ノ万物ハ必ス共同相合シテ相侵サス相離レサル進歩ヲナシ生長ノ諸動機中ニ於テ真理ノ兩作用（差別平等）ノ變偏の増長ヲ生スルコトナクハ其本性ヲ完成シタリト云フナリ、

人類ノ原性已ニ此ノ如シ、故ニ本館ノ学籍名簿ニ署名スルモノハ凡テ仏教ノ道德ヲ守リ仏教ノ慈育ヲ受クルモノトス、之レ真ニ人類タルノ本面目ニシテ今古東西ニ通シテ完美ナル醇純教育ナリ、所謂其道德トハ四恩ヲ知リ且之カ報恩ヲ実行スルコトニシテ、慈育トハ仏教旨義ノ教育ニヨリテ四智ヲ探求スルナリ、探求シ得テ圓滿ナラシムル、惟ルニ身軀ノ長養モ智力ノ完成モ之ヲ遂クルノ方法ハ同一軌道ナリトス、即チ共ニ充實ナル食物

ト適當ナル分量ト正當ナル時間トヲ要シ、之ニ依テ之ヲ用キタル後ハ心身ノ労働ヲ以テ食物（知識）ヲ消化シ及同化セシメ心身ノ榮盛ヲ永續保全スルコトヲ主トセサル可ラス、

四智トハ即チコノ食物ヲ得ルノ道ニ於ケル指南車ニシテ而消化及同化ヲ掌ルノ營養機ナリ、且心身ヲ運用シテ其（心身）強壯ヲ持續スルノ主管者ナリ、四智ノ第一ヲ平等性智ト云ヒ順序正シク且緻密ニ整備セル知識ニシテ根拠アル見識ナリ、第二ヲ妙觀察智ト云ヒ万物ノ上ニ於テ其光リヲ現スルモノニシテ完全ナル論法——明晰ナル言語——老練ナル文章ニヨリ全力ノ智識ヲ發表シ驚真ニ物心ノ干係ヲ瞭然ナラシムルノ能力ナリ、第三ヲ成所作智ト云ヒ實際ノ業ニ施行活用スヘキ識力ニシテ最モ緊要ニ最モ勢力アル總念ナリトス、若シコノ智ナキトキハ假令何程ノ智識ヲ腦裡ニ注入ストモ心力ノ強壯ト智力ノ活発トハ到底望ム可ラス、吾人ガ知識ノ智識タルヲ知ルハ——吾人カ知識ノ本面目ハ——實ニ此智ニ依テ始テ現スルナリ、此優勝劣敗ノ生存競争世界ニ對シテ自己ノ健康ト自己ノ尊榮トヲ維持シ、其一身ヲ理スルニ當テモ他人ニ己レノ分ヲ奪ハレ又ハ他人ノ分ヲ犯シ、彼我平等ノ理社会倫理ノ義ヲ壞破スルノ憂ナク、是トニ此智ノ応用無辺ナル殆ント側度以外ニ出ルコト多シ、第四ヲ大円鏡智ト云ヒ教育哲学ニ所謂美育ヨリ生スル哲理ノ意匠コレナリ、真ニ社会外ニ超越セル見識ナリ、解脱ノ真相ナリ寂靜ノ光輝ナリ、出家（國家ノ範圍外ニ表出シテ國家ヲ觀察スルノ義）トシテ——宗教家トシテノ——教育家トシテノ——最要素——真元素——大智能ナリ、夫レ然リ此四智ヲ得ルノ順序ハ決シテ艱澁ナラス、僅ニ仏教家ノ脚下ニアル——仏教信徒ノ叻迎ニアル戒定慧ノ三行為實ニ能ク之カ先鋒タリ之カ嚮導タリ矣——本館ノ連員ヨ、子等ハ己ニ戒定トヲ得タル所ノ志士ト認定スルカ故ニ、今ヤ子等ハ實ニ四智ヲ得ルノ道ニ當リ四智ヲ買フノ門ニ立テリト云フヘシ、



道德トハ何物ゾ、倫理トハ何物ゾ、コレ唯一語ヲ用テ断定シ得ヘシ、曰ク人々ノ交際ト社会一ケ人トノ關係ヲ完全ニシ其間ニ於テ人ノ人タルニ背カサル一人類ノ真面目ニ相当ナル運動ヲ遂ケシムルヲ云フナリ、此運動ハ実ニ錯綜複雑ニシテ一二語ノヨク言ヒ尽スヘキニ非レトモ、要スルニ真如ノ定律ニ依遵奉行スルノ一習慣ヲ名ツケテ倫理ナリ道德ナリト云フニ過キス、故ニ仏教ノ道德ハ四恩ヲ報スルヲ以テ至レリ尽セリノ聽義ナリトス、

實ニ然リ四恩トハ第一ニ父母ノ恩ナリ、コノ恩ヲ名クテ人類本然ノ情義ト云フモ不可ナカルヘシ、即チ父母ノ愛情ニ次テ之ニ反射(報告)スヘキ感応ニシテ法律ヲモ倫理ヲモ要セサル程ノ世界ニモ亦必アルヘク一十界ニ通シテ必ス在ルヘキモノ道交ナリトス、第二ニ三宝ノ恩ト云フハ將來我身ノ居ルヘキ所一我心ノ住スヘキ境界一人間行為ノ圈廓(規矩準繩)ヲ造ルヘキ機械ノ根本台ニシテ即チ三種ノ宗教家(仏法僧)ノ垂示教訓及從來信徒ノ行為並ニ信徒ノ上ニ現シタル妙好ノ実例コレナリ、第三ハ衆生ノ恩ニシテ凡テ社界ノ人々ハ間接若シクハ直接ニ於テ互ニ相益シ相補フモノナレハ一身ノ經驗上(農工商諸業)及社会ノ組織上(国郡ノ区画)ヨリ此恩ヲ發生スルナリ、所謂同感ナリ同情ナリ博愛心ナリ四界兄弟一視同仁等ヲ語ハ此報恩ヲ知りタル人ノ上ノニミ於テ実行セラルヘキ道義原則ナリ、第四ニハ國王ノ恩ナリ、社会組織ノ定則ノ敷衍ト人間相互ノ關係ノ研究トニ由テ考フルトキハ吾人ノ社会ヲ成ス以上ハ道德及政治ノ完全即チ一身一家一國ノ安寧幸福ヲ維持スルカ為メニ實ニ其主宰者(社会ニ於ケル)ノ必要ヲ知ル否此主宰者ノ美ニシテ清キ心ニ依テ吾人ノ幸福ノ円満ヲ得ヘキヲ知ル、故ニ吾人ハ其國ヲ愛スル一其身ヲ愛スル等ノ心ト國王ヲ敬シ國王ヲ愛シ國王ヲ慕ヒ國王ヲ重ンスルノ心トカ一致シツツアルヲ知り得ル一証シ得ル一而信シ得ルナリ、以上ノ如ク已ニ四智ヲ得テ四恩ヲ報スルコトヲ得ハコレ業ニ社会ノ義務尽キヌ一吾人ノ事業畢リヌ一而仏

教ノ真体現前ス、噫是ニ至リテ將タ何ヲカ云ハン、之ニ加ハラハ却テ汗点ヲ現スヘシ、宝鏡却テ瑕影ヲ留ムヘシ喝、

已ニ四智四恩、即チ仏教ノ倫理及教育ヲ解説シ了リタレハ直ニ進シテ本館ノ自働(張力)及能働(活力)ノ本拠ヲ示サン、前ニ述ルカ如ク真理モ亦不順序ノ生長ヲナスヲ免レサル以上ハ、人ノ能力發達ニ於テモ亦相当ノ誘因觀發ヲナスニ非サレハ偏頗ノ生長其極遂ニ人類中ニ非常ノ階級ヲ造ルニ至ルヘシ(今ノ世界即チ之ナリ)、何トナレハ天然ニ据ヘオキテ開發ノ補助ナキ、或ル人種ハ優勝劣敗ノ今世界ニ遭遇セラルルコト恰モ法律カ故意ノ罪犯ヲ処分スルカ如ク、故意ニ曖昧愚鈍ナルモノト看ナサレテ造物者ハ毫モ假ス所ヲ懲罰シ之ヲ不幸ニ陥シ而懲罰セラレ一虐待セララル曖昧人種カ無智無能ニ因テ此懲罰ヲ受クルモノナリト云コト(天然ノ懲罰ノ理由)ヲ自ラ探索發見スルヲ待ツモノニ似タリ、何ソ造物者ノ無情極ルヤ、我仏教ハ之ニ異ナリ造物者カ正ニ譴責ヲ下スヘキ事情ノ於テ其兆□ヲ發見シ、無知不能及故意ニ似タル痴呆ニ問テ其注意ヲ喚起シ、其不足ヲ補ヒ予メ造物者ノ法網ニ触ルルヲ(未發ニ)防キ而特ニ造物者ノ懲罰ヲ免ルルノミナラス、真如社会ニ入社シテ我仏如来ノ褒賞(授□)ヲ獲得スル良方ヲ教示スルモノナリ、

蓋シ純粹ナル仏教者カ仏教ノ教育ヲ受ケ仏教ノ倫理ヲ守ルモノノ狀況奈何ト云フニ、其完美ナル教育ニ於テ肉親ハ已ニ十分ナル鍛練ヲ得テ、能ク思想ト相應聲援シ其心ノ能力ハ本然ノ真理ヲ悟リ其作用ノ原則(十如是)ヲ知り其感応情機ハ却テ活発剛健ナレトモ、能ク倫理ノ法則ニ拠リ凡テノ恣擅ナル情欲ヲ抑制シ、旺盛ナル意志ト純粹ナル真理ト同一ニシテ自然(天工)匠作(人造)ノ美好(審美哲学ノ神髓)ヲ愛シ、凡テノ不善ノ種子ヲハ悉ク之ヲ排斥枯槁セシメ、我ニ均シク他人ヲ愛シ他人ヲ重スル(社会哲学ノ黄金世界ノ道德)ノ美風ヲ成スモノ之ヲ真

ノ仏教ニ因テ智徳ヲ完成シタリト為ス、是等ノ人ハ其金剛不壞ノ能力ヲ以テ智ノ有シ限りノ力ノ及フ限り真理ト相伴ヒ相和シ善ク真理ノ要求ニ応シ巧ニ真理ニ沿フテ自己ノ限淨ク美シキ智徳ヲ充實セシムルナリ、之ヲ稱シテ能ク(我身ヲ以テ)真理ノ用ニ応シ能ク(我身ノ為ニ)真理ヲ用ニ供スルモノトハ云フナリ、

上ニ述タル真意ヲ充分ニ會得シ了リテ此学籍名簿ニ署名シ仏教ノ模型ニ就テ智識ノ鍊成シ、仏教ノ範圍ニ於テ徳義ヲ培養シ無垢ノ成道(真理ノ運轉)ヲ得ンコトヲ誓フヘシ、

夫學問ノ範圍甚タ広キモノハ其材料モ亦随テ頗ル繁雜ニ極ム、或ハ高尚ニシテ空理ニ偏シ或ハ狭小ニシテ應用ヲ欠ク、故ニ初學者其取捨ニ惑ヒ空談虚弁ニ走り實際ニ不親切ナルノ過チニ陥ルコトアリ、本館ニ入ルモノカ必ス知ルヲ要スルハ万般ノ學術ハ凡テ事實ニ由テ研究シ之ヨリ無形ノ理ヲ探リ集メテ求メ得ルヲ斷メ得ル以テ有形ノ用ニ応スルモノタルコト、語ヲ更ヘテ云ヘハ凡テ學術ハ悉ク事實ノ歸納法タルニ過キスト云コト之ナリ、故ニ□ニ一嚴格ニ一此序文ノ結末ヲ成サンカ為ニ算數字ノ格言ヲ用テ最後陣ナル輻重兵ノ位置(本館存立ノ目的)ヲシテ確固不拔ナラシメントス、曰ク用ハ其目的ナリ理ハ之カ媒介タリ而メ事實ハ數ノ原基タリト矣、

